新潮社版
日本現代文學
全集
6

幸田露伴集

日本現代文學全集・講談社版 6

幸田露伴集

日本現代文學全集
6
幸田露伴集

編集
伊藤　整
亀井勝一郎
中村光夫
平野　謙
山本健吉

昭和38年1月10日　印刷
昭和38年1月19日　發行

定價　500圓

© KŌDANSHA 1963

著者　幸田露伴（こうだろはん）

發行者　野間省一

印刷者　北島織衛

發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽町3〜19
電話東京(941) 3111(大代表)
振替東京　3930

印刷　大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷　株式會社興陽社
製本　株式會社大進堂
製函　株式會社岡山紙器所
株式會社第一紙藝社
背革　厚川株式會社
表紙クロス　株式會社石井
口絵用紙　日本加工製紙株式會社
本文用紙　本州製紙株式會社
函貼用紙　安倍川工業株式會社
見返し用紙　三菱製紙株式會社
扉用紙　神崎製紙株式會社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

幸田露伴集　目次

卷頭寫眞

筆　蹟

風流佛……五
毒朱唇……二六
對髑髏……三二
艶魔傳……四四
五重塔……五九
新浦島……九二
二日物語……一一七
雁坂越……一二八
望樹記……一三八
觀畫談……一五四
骨　董……一六四
幻　談……一七五
雪たゝき……一八六
連環記……二〇六
狂濤艶魂……二三六
師　師……二四〇
運　命……二四八
平將門……二九三

蒲生氏郷……三一六
活死人王害風……三五五
魔法修行者……三八一
水滸傳の批評家……三九三
怪　談……三九八
饗庭篁村と須藤南翠……四〇五
淡島寒月氏……四〇八
樋口一葉……四一〇
嗚呼春廼屋主人……四一三
將棋雜考……四一六
水の東京……四二四
雨の釣……四四二
作品解說……山本健吉　四四七
幸田露伴入門……柳田　泉　四五四
年　譜……四六二
參考文獻……四七四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

幸田露伴集

江の秋や釣の舟

蕉門

茅舎

かゝはる

風流佛

發端　如是我聞

上　一向專念の修業幾年

三尊四天王十二童子十六羅漢さては五百羅漢までを胸中に藏めて鉈小刀に彫り浮かべる腕前に、運慶も知らぬ人は讃歎すれども鳥佛師知る身の心恥かしく、其道に志す事深きにつけておのが業の足らざるを恨み、爰日本美術國に生れながら今の世に飛驒の工匠なしと云はせん事殘念なり、珠運命の有らん限りは及ばぬ力の及ぶ丈ヶを盡してせめては我が好の心に滿足さすべく、且は石膏細工の鼻高き唐人めに下目で見られし鬱憤の幾分を晴らすべしと、可愛や一向專念の誓を嵯峨の釋迦に立し男、齡は何歳ぞ二十一の春。是より風は嵐山の霞をなぐつて腸を斷つ誹諧師が、蝶になれ〳〵と祈る落花のおもしろきをも眺むる事なくて、見ぬ天竺の何の花彫りかけて永き日の入相の鐘にかなしむ程凝り固つては、白雨三條四條の塵埃を洗つて小石の面はまだ乾かぬに、空さりげなく澄める月の影宿す清水に、瓜浸して食ひつゝ齒牙香と詩人の洒落る川原の夕涼み快きをも餘所になし、徒らに垣をからみし夕顏の暮れ殘るを見ながら白檀の切り屑蚊遣りに燒きて、是も餘德とあり難がるこそおかしけれ。顏の色を林間の紅葉に爭ひて酒に暖めらるゝ風流の仲間にも入らず、硝子越しの雪見に昆布を蒲團にしての湯豆腐を粹がる徒黨にも加はらねば、まして島原祇園の艶色には横眼遣ひ一ートつせず、おのが手作りの辨天樣に涎流して餘念なく惚れ込み、琴三味線のあぢな小歌は聞きもせねど、夢の中には緊那羅神の聲を耳にするまでの熱心、あはれ毘首竭摩の魂魄も乘り移らでやあるべき。かくて三年ばかり浮世を驀直に渡り行きければ、勤むるに追付く惡魔は無き道理、殊さら幼少より備つての稟賦、雪をまろめて達摩を作り、大根を斬りて鷲の形を寫しゝにさへ屢人を驚かせしに、修業の功を積し上奮發の勇を加へしなれば、冴し腕は愈ゝ冴へ、鋭き刀は愈鋭く、七歳の初發心二十四の曉に成道して師匠も是までなりと許すに、珠運は忽ち思ひ立ち獨身者の氣樂さ、親讓りの家財を賣つてのけ、いざや奈良鎌倉日光に昔の工匠が跡訪はんと少し計の道具を肩にし、草鞋の紐の結ひなれで度ゝ解くるを笑はれながら、物のあはれも是よりぞ知る旅。

下　苦勞は知らず勉强の德

汽車もある世に、さりとては修業する身の痛ましや、菅笠は街道の埃に赤うなつて肌着に風呂場の虱を避け得ず、春の日永き啜に疲れては蝶うら〳〵と飛ぶに翼羨ましく、秋の夜は淋しき床に寢覺めて隣りの齒ぎしみに魂を驚かす。旅路のなさけなき事、風吹き荒み熱砂顏にぶつかる時、眼を閉ぎてあゆめば、邪見の喇叭氣を注けろがら〳〵の馬車に膽ちゞみあがり、雨降り切りては新道のさくれ石足を嚙むに生爪を剝して惱むを、胴慾の車夫法外の價を貪り、尙も並木で五割酒錢は天下の法だとゆする、仇もなさけも一日限りの、人情は薄き掛け蒲團に襟首さむく、待遇は冷な平の內に蒟蒻黑し。珠運素より貧きには馴れても、加茂川の水柔らかなる所に生長て、初て野越え山越えのつらさを覺えし草枕、露に濕りて心細き夢おぼつかなくも馴れし都の空を遠るに、無殘や郭公待もせぬ耳に眠りを切つて破れ戸の罅隙に、我は顏の明星光りきらめくうら悲しさ、或

は柳散り桐落て無常身に染る野寺の鐘、つくづく生命は森を縫ふ稻妻のいと續き難き者と觀ずるに付ても志願を遂ぐる道遠しと、意馬に鞭打ち勵ましつ、漸く東海道の名刹古社の神像木佛梁欄間の彫りまで見巡りて鎌倉東京日光も見たり、是より最後の樂は奈良じやと急き登り行く碓氷峠の冬最中、雪たけありて裙寒き淺間下ろしの烈しきにめげず臆せず、名に高き和田鹽尻を藁沓の底に踏み蹂り、木曾路に入りて日照山、棧橋寢覺後になし須原の宿に着けり。

第一　如是相

書けぬ所が美しさの第一義諦

名物に甘き物ありて、空腹に須原のとろゝ汁殊の外妙なるに、飯幾杯か滑り込ませたる身體を此儘寢さするも毒とは思へど爲る事なく、道中日記注け終ひて、のつそつしながら煤びたる行燈の横手の樂書を讀めば、山梨縣士族山本勘介大江山退治の際一泊と禿筆の跡。さては英雄殿もひとり旅の退屈に閉口しての御わざくれ、おかしき計りかあはれに覺えて、初對面から膝をくづして語る炬燵に相宿の友もなき珠運、微なる埋火に脚を烘り、つくねんとして櫓の上に首投かけ、うつら〳〵となる所へ此方をさして來る足音、しとやかなるは踵に龜裂きらせしさき程の下女ならず。御免なされと襖越しのやさしき聲に胸ときめき、爲かけた欠伸を半分嚙みて何とも知れぬ返辭をすれば、唐紙する〳〵と開き丁寧に辭義して、冬の日の木曾路、嘸や御疲に御座りませうが、御覽下され是は當所の名譽花漬、今年の夏のあつさをも越して今降る雪の眞最中、色もあせずに居りまする梅桃櫻のあだくらべ、御意に入りましたら蔭膳を信濃へ向けて人知らぬ寒さを知られし都の御方へ御土產に、と心憎き愛嬌言葉、商買の艶とてなまめかしく、賣物に香を添ゆる口のきゝぶりに利發あらはれ、世馴れて澁らず、さりとて輕佻にもなきとりなし、持ち來りし包紙にひらきて二箱三箱差し出す手つきのしほらしさに、花は餘所になりてうつゝなく覗き込む此方の眼を避けて背向くる顏、折から隙間洩る風に燈火動きて明らかには見えざるにさへ隱れ難き美しさ。我折れ深山に是は何物。

第二　如是體

粹の父の子實の母の子

見て面白き世の中に聞て悲しき人の上あり。昔は此京にして此妓ありと評判は八坂の塔より高く、其名は音羽の瀧より響きし室香と云へる藝子ありしが、さる程に地主權現の花の色盛者必衰の理をのがれず、梅岡何某と呼ばれし中國浪人のきりゝとして男らしきに契を込め、淺からぬ中となりしより、他の戀をば贔負にする客もなく、よぶ人の絕ゑになるにつけても、よしやわざくれ身は朝顏のと短き命捨擲にしてからは、恐ろしき者にいふなる新徵組何の怖い事なく、三筋取つても一筋心に君さま大事と、時を憚り世を忍ぶ男を隱匿し半年あまり、苦勞の中にも助る神の結び玉ひし緣なれや、嬉しき情の胤を宿して帶の祝ひ芽出度悅びしが、舒びし眉間に忽ち皺の浪立て騷がしき鳥羽伏見の戰爭。さても方樣の憎い程の氣强さ、爰なり丈夫の志を遂ぐるはと、一ト群の同志を率ゐて官軍に加はらんとし玉ふを、止むるにはあらねど生死爭ふ修羅の巷に踏入りて、雲のあなたの吾妻路、空寒き奧州にまで、歸る事は云はずに旅立玉ふ離別には、是を出世の御發途と義理で曉して雄ゝしき詞を、口に云はする心が眞情か、狹き女の胸に餘りて案じ過せば潤む眼の、涙が無理かと、粹ほど迷ふ道多くて自分ながらに思ひ分たず、うろうろする內日は消て愈〻となり、義經袴に男山八幡の守くけ込むで愚なと笑片頰に叱られし昨日の聲はまだ耳に殘るに、今、今の御姿はもう一里先か、ヱゝせめては一日路程も見透したきを役立ぬ此眼の

腹立しやと、門邊に伸び上りての甲斐なき繰言それも尤なりき。

一ト月過ぎ二タ月過ても、此恨綿ころ〳〵として、筑紫琴習ふ隣家の妓がうたふ唱歌も我に引き較べて絶ゆる事なく悲しきを、コロリン、チャンと濟して貰ひ度しと無慈悲の借金取めが朝に晩にの掛合、返答さへも力無や、男松を離れし姫蔦の、斯も世の風に嬲らるゝ者かと俯きて、横眼に交張りの袋戸に廣重が繪見ながら、悔しいにつけてゆかしさ忍ばれ、早う歸つて下されと獨言口を洩るれば、利足も拂はず歸れとはよく云へた事と吠付れ、ア、大きな聲して下さるな、あなたにも似合はぬ、と云ひさして、御腹には大事の大事の我子ではない顔見ぬ先からいとしうてならぬ方樣の紀念、唐土には胎教といふ事さへありてゆるがせならぬ者と或夜の物語りに聞しに此ありさまの口惜と腸を斷つ苦しさ。天女も五衰ぞかし、玳瑁の櫛、眞珠の根掛いつか無くなりては華鬘の美しかりける俤とゞまらず、身だしなみも懶くて、光ると云はれし色艶屈托に曇り、好みの衣裳數こ彼に取られ是に易へては、着古しの平常衣一つ、何の燒かけの靈香薫ずべき。泣き寄りの親身に一人の弟は、有つても無きに劣る賭博好き酒好き、落魄て相談相手になるべきならねば賴むは親切な雇婆計り、あぢきなく暮らす中、月滿て產聲美しく玉のやうな女の子、辰と名付られしはあの花漬賣りなりと、是も昔は伊勢參宮の御利益に粹といふ事覺へられしらしき宿屋の親爺が物語に、珠運も木像ならず、涙掃つて其後を問へば、御待なされ、話しの調子に乘つて居る內、爐の火が淋しうなりました。

第三　如是性

上　母は嵐に香の迸る梅

山家の御馳走は何處も豆腐湯波干鮭計りなるが、今宵はあなたが態こ茶の間に御出掛にて、開化の若い方には珍らしく此兀爺の話を冒頭から潰さずに御聞なさるが快ければ、夜長の折柄お辰の物語を御馳走に饒舌りませう、殘念なは去年ならばもう少し面白くあはれに申し上て輕薄な京の人、イヤ是は失禮、優しい京の御方の涙を本曾に落させやう者を、惜しい事には前齒一本缺た所から風が洩つて此春以來御文章を讀も下手になつたと、菩提所の和尙樣に云はれた程なれば、ウガチとかコガシとか申す者は空拔にしてと斷りながら、青內寺煙草二三服馬士張りの煙管にてスパリ〳〵と長閑に吸ひ、無遠慮に梢さし燒べて舞立つ灰の雪袴に落ち來るをぽんと擲きつ、どうも私幼少から讀本を好きました故か、斯いふ話を致しますると圖に乘つておかしな調子になるそうで、人我の差別も分り憎くなると孫共に每度笑はれまするが、御聞づらくも癖なれば癖ぞと御免なされ。

さてもそののち室香はお辰を可愛しと思ふより、情には鋭き女の勇氣をふり起して昔取つたる三味の撥再び握つても、色里の往來して白痴の大盡、生な通人めらが間の周旋、浮れ車座のまはりをよくする油さし商買は嫌なりと、此度は象牙を柊に易へて兒供を相手の音曲指南、藝は素より鍛錬を積たり、身持は淫ならず、且は我子を育てんといふ氣の張あれば、おのづから弟子にも親切あつく、良い御師匠樣と世に用ゐられて爰に生計の糸口も明き、細いながら炊煙絶せず安らかに日は送れど、稽古する小娘が調子外れの金切聲、今も昔わー引ワッとお辰のなき立つ事の屢なるに胸苦しく、苦勞ある身の乳も不足なれば、思ひ切つて近き所へ里子にやり、必死となりて稼ぐありさま、餘所の眼にさへ是を見て感心なと泣きぬ。それにつれなきは方樣の其後何の便もなく、手紙出そうにも當所分らず、まさかに親子笈づるかけて順禮にも出られねば逢ふ事は夢に計り、覺めて考ふれば口をきかれなかつたはもしや流丸にでも中られて亡くなられたか、茶絶鹽絶きつとして祈るを御存知ない筈も無かろうに、神樣も戀しらずならあり難くなし、と愚痴と一所にこぼるゝ涙、流れて止らぬ月日をいつも〳〵憂ひに明し恨に暮らして我齡の

寄るは知らねども、早い者お辰はちよろ〳〵歩行、折ふしは里親と共に來てまはらぬ舌に菓子ねだる口元、いとしや方樣に生き寫しと抱き寄せては放し難く、遂に三歳の秋より引き取つて膝下に育れば、少しは紛れて、貧家に溫き日のあたる如く、淋しき中にも貴き笑の唇に動きしが、さりとては此子の愛らしきを見樣とも仕玉はざるか、歸家れざるつれなさ、子供心にも親は戀しければこそ、父樣御歸りになつた時には斯して爲る者ぞと敎へし御辭誼の仕樣能く覺へて、起居動作のしとやかさ、能く仕付たと譽らるゝ日を待て居るに、何處の龍宮へ行かれて乙姫の傍にでも居らるゝ事ぞと、少しは邪推の悋氣萌すも、我を忘れられしより子を忘れられし所には起る事、正しき女にも切なき情なるに、天道怪しくも是を惠まず、運は賽の眼の出所分らぬ者にて、お辰の叔父ぶんなげの七と諢名取りし蕩樂者、男は好けれど根性圖太く、誰にも彼にも疎まれて、大の字に寢たとて一坪には足らぬ小さき身を廣き都に置きかね、漂泊ありきの渡り大工、段〻と美濃路を歷て信濃に來り、折しも須原の長者何がしの隱居所作る手傳ひ、柱を削れ羽目板を付ろと棟梁の差圖には從へど、墨繩の直なには傚はぬ横道、お吉樣と呼ばせらるゝ祕藏の孃樣にやさしげな濡を仕掛け、鉋屑に墨さしで思を云はせでもしたるか、とう〳〵そゝのかしてとんでもなき穴掘り仕事。それも緣なら是非なしと愛に暗むで男の性質も見分ぬ長者のゑせ粹、三國一の狼婿、取つて安堵したと知らぬが佛樣に其年なられし跡は、山林家藏椽の下の糠味噌瓶まで讓り受けて、村中寄合ひの席に肩ぎしつかせての正坐、片腹痛き世や。

あはれ室香はむら雲迷ひ野分吹く頃、少しの風邪に冒されてより枕あがらず、秋の夜冷に蟲の音遠ざかり行くも觀念の友となつて獨り寢覺の床淋しく、白ら露霜のやがて消ぬべきを悟り、お辰素性のあらまし顚ふ筆のにじむ墨に覺束なく認めて守り袋に父が書き捨の短册一トひらと共に藏めやりて、明日をもしれぬ我がなき後賴りなき此子、如何なる境界に落るとも加茂の明神も御憐愍あれ、其人命あらば巡り合せ玉ひて、藝子も女なり、優しき心入れ嬉しかりきと方樣の一言、草葉の蔭に聞せ玉へと、遙拜して閉ぢたる眼をひらけば、燈火僅に螢の如く、弱き光りの下に何の夢見て居るか罪のなき寢顏、せめてもう十計りも大きうして銀杏髷結はしてから死にたしと袖を嚙みて忍び泣く時、お辰魘はれてワッと聲立て、母樣痛いよ〳〵、私の父樣はまだ歸へらないかへ、源ちやんが打つから痛いよ、父の無いのは犬の子だつてぶつから痛いよ。オゝ道理じやと抱き寄すれば、其儘すや〳〵と睡るいぢらしさ。アゝ死なれぬ身の疾病、是ほどなさけなき者のあろうか。

下　子は岩蔭に咽ぶ清水よ

格子戸がら〳〵とあけて、閉る音は靜なり。七藏衣裳立派に着飾りて顏付高慢くさく、無沙汰謝るにはあらで誇り氣に今の身となりし本末を語り、女房に都見物致させかた〴〵御近付に連て參つた、と大風なる言葉の尾につきて、下ぐる頭も低くしとやかに、妾めは吉と申す不束な田舍者、仕合せに御緣の端に續がりました上は何卒末長く御眼かけられて御不承ながら眞實の妹とも思しめされて下さりませと、演る口上に樸厚なる山家育ちのたのもしき所見えて室香嬉敷、重き頭をあげてよき程に挨拶すれば、女心の柔なる情ふかく、姉樣の是ほどの御病氣、殊更御幼少のもあるを他人任せにして置きまして、祇園清水金銀閣見たりとて何の面白かるべき、妾は是より御傍さらず御看病致しましよ、と云へば七藏顏膨らかし、腹の中には餘計なと思ひ乍ら、ならぬとも云ひ難く、それならば家も狹し、おれ丈ヶは旅宿に歸るべしといつて、其晩は夜食の膳の上、一酌の醉に浮れてのそゞろあるき、鼻歌に酒の香を吐き、川風寒き千鳥足、亂れてぽんと町か川端あたりに止まりし事あさまし。

室香はお吉に逢ひてより三日目、我子を委ぬる處を得て氣も休まり、爰ぞ天の惠み、臨終正念違はず、安かなる大往生、南無阿彌陀佛は嬉喉に粹の果を送り三重、鳥部野一片の烟となつて御法の風に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

舞ひ扇、極樂に歌舞の女菩薩一員增したる事疑ひなしと、樣子知りたる和尙樣隨喜の涙を落されし。お吉其儘あるべきにあらねば雇ひ婆には錢やつて暇取らせ、色ゝ片付るとて持佛棚の奧に一つの包物あるを、不思議と開き見れば樣ゝの貨幣合せて百圓足らず、是はと驚きて能ゝ見るに、我身萬一の時お辰引き取つて玉はる方へ、せめてもの心計りに細き暮らしの中より一錢二錢積み置きて、是をまゐらするなりと包み紙に筆の跡、讀みさして身の毛立つ程悲しく、是までに思ひ込まれし子を育てずに置れべきかと、遂に五歲のお辰をつれて夫と共に須原に戻りけるが、因果は盞皿の緣のまはり、七藏本性をあらはして不足なき身に長半をあらそへば、段ゝ惡徒の食物となりて瘦せる身代の行末を氣遣ひ、女房うるさく異見するに、何の女の知らぬ事、ぴんからきりまで心得て穴熊毛綱の手品にかゝる我ならねば、負くる計りの者にはあらずと駈出して三日歸らず、四日歸らず、或は松本善光寺、又は飯田高遠あたりの賭場あるき、負れば尙も盜賊に追ひ錢の愚を盡し、勝てば飯盛に祝ひ酒のあぶく錢を費す、此癖止めて止まらぬ春駒の足搔早く、坂道を飛び下るより迅に、親讓りの山も林もなくなりかゝつてお吉心配に病死せしより、齡は僅に十の冬、お辰浮世の悲みを知りそめ、叔父の歸宅ぬを困りて途方に暮れ居たるに、近所の人ゝ、彼奴め長久保のあやしき女の許に居續して妻の最期を餘所に見る事憎しとてお辰をあはれみ助け葬式濟せけるが、七藏其後愈身持放埒となり、村內の心ある者には爪はじきせらるゝをもかまはず、遂に須原の長者の屋敷も空しく庭中の石燈籠に美しき苔を添へて人手に渡し、長屋門のうしろに大木の樅の梢吹く風の音ばかり今の耳にも替らずして、直其傍なる荒屋に住ひぬるが、さても下駄の齒と人の氣風は一度ゆがみて一代なほらぬもの、何一ト つ滿足なる者なき中にも盃のみは缺けず、柴木へし折つて箸にしながら象牙の骰子に誇るとこそ愚なれ。

かゝる叔父を持つ身の當惑、御嶽の雪の肌淸らかに、石楠の花の顏氣高く生れ付てもお辰を嫁にせんといふ者、七藏と云ふ名を聞ては山拔け雪流より恐ろしく、おぞ毛ふるつて思ひ止れば、二十を越して痛ましや生娘、晝は賃仕事に肩の張るを休むる間なく、夜は宿中の旅籠屋廻りて、元は穢多かも知れぬ客達にまで嬲られながらの花漬賣、歸りは一日の苦勞の塊り銅貨幾箇を酒に易へて、御淋しう御座りましたろう、御不自由で御座りましたろうと機嫌取りどり笑顏してまめやかに仕ふるにさへ時ゝは無理難題、先度も上田の娼妓になれと七めの云ひ掛りしよし。さりとては胴慾な男め、生餌食ふ鷹さへ暖め鳥は許す者を。

第四　如是因

上　忘られぬのが根本の情

珠運は種ゝの人のありさま何と悟るべき者とも知らず、世のあはれ今宵覺へて屋の角に鳴る山風の寒さ一段身に染み胸痛きまでの悲しさ、我事のやうに鼻詰らせながら亭主に禮云ひておのが部屋に戻れば、忽氣が注は床の間に二ヲ箱買つたる花漬、衣脫ぎかへて轉りと横になり、夜着引きかぶればあり〳〵と浮ぶお辰の姿、首さし出して眼をひらけば花漬、閉づればおもかげ、是はどうじやと呆れてまた候眼をあければ花漬、アヽ是を見ればこそ浮世話も思ひの種となつて寢られざれ、明日は馬籠峠越えて中津川迄行かんとするに、能く休までは叶はじと行燈吹き消し意を靜むるに、又しても其美形、エヽ馬鹿なと活と見ひらき天井を睨む眼に、此度は花漬なければ闇はあやなしあやにくに、梅の花の香は箱を洩れてする〳〵と枕に通へば、何となくときめく心を種として咲も咲たり、桃の媚櫻の色、さては薄荷菊の花まで今眞盛りなるに、蜜を吸はんと飛び來る蜂の羽音もどこやらに聞ゆる如く、耳さへいらぬ事に迷つては愚なりと瞼堅く閉ぢ、搔卷頭を蔽ふに、さりとては怪しからず麗しき幻の花輪の中に愛嬌を湛へたるお辰、氣高き計りか後光朦朧とさして

白衣の觀音、古人にも是程の彫なしと好な道に恍惚となる時、物の響は冴ゆる冬の夜、臺所に荒れ鼠の騷ぎ、憎し、寢られぬ。

下　思ひやるより增長の愛

裏付股引に足を包みて頭巾深ゝとかつぎ、然も下には帽子かぶり、二重とんびの扣釦惣掛になし其上首筋胴の周圍、手拭にて動がぬ樣縛り、鹿の皮の袴に脚絆油斷なく、足袋二枚はきて蔓沓の爪先に唐辛子三四本足を燒ぬ爲押し入れ、毛皮の手甲して若もの時の助けに足橇まで脊中に、用意十二分にしてさへ此大吹雪は容易の事にあらず、吼立る天津風、山ゝ鳴動して峰の雪、梢の雪、谷の雪、一齊に舞立つ折は一寸先見へ難く、瞬間に路を埋め脛を埋め、鼻の孔まで粉雪吹込んで水に溺れしよりまだ〳〵苦し、ましてや准備おろかなる都の御客樣なんぞ命惜くば御逗留なされ、と朴訥は仁に近き親切。なるほど話し聞てさへ恐ろしければ珠運別段急ぐ旅にもあらず、されば今日丈御厄介になりましよ、と尻を炬燵に居て、退屈を輪に吹く煙草のけぶり、ぼんやりとして其邊見回せば、端なく眼につく柘植のさし櫛。扨は花遺賣が心づかず落とし行しかと手に取るとたん、早や其人床しく、昨夕の亭主が物語今更のやうに思ひ出されて、叔父の憎きにつけ世のうらめしきに付け、唯何となくお辰可愛く、おれが神佛なら七藏頓死させて行衞しれぬ親にはめぐりあはせ、宮內省よりは貞順善行の綠綬紅綬紫綬、あり丈の褒章頂かせ、小說家には其あはれおもしろく書かせ、祐信長春等呼び生して美しさ十分に寫させ、そして日本一大ゝ盡の嫁にして、あの雜綴の木綿着を綾羅錦繡に易へ、油氣少きそゝけ髮に極上ゝ正眞伽羅栴檀の油付さし、握り飯ほどな珊瑚珠に鐵火箸ほどな黃金脚すげてさゝしてやりたいものを、神通なき身の是非もなし、家財賣て退けて懷中には猶三百兩餘あれど、是は我身を立る基、道中にも片足滿足た草鞋は捨ぬくらゐ儉約して居るに、絹絞の半掛一ト つたりとも空に惠む寡離し、さりながらあまりの慕はしさ、忘られぬ殊勝さ、かかる善女に結緣の良き方便もがな、噫思ひ付たりと、小行李とくとく小刀取出し、小さき砥石に鋒尖鋭く礪ぎ上げ、頓て櫛の棟に何やら一日掛りに彫り付、紙に包むでお辰來らばどの樣な顏するかと待ちかけしは、戀は知らずの粹樣め、おかしき所業あてが外れて其晩吹雪尙やまず、女の何としてあるかるべきや。

されば流れざるに水の溜る如く、逢はざるに思は積りて愈なつかしく、我は薄暗き部屋の中、煤びたれども天井の下、赤くはなりてもまだ破れぬ疊の上に坐し、去歲の春にすが漏したるか怪しき汚染は瀧の糸を亂して畫襖の李白の頭に濺げど、たて付よければ身の毛立程の寒さを透間に嘲ちもせず、兎も角も安樂にして居るにさへ、うら寂しくて自悲を知るに、ふびんや少女の、あばら屋といへば天井も無かるべく、屋根裏は柴燒く煙りに塗られてあやしげに黑く光り、火口の如き煤は高山の樹にかゝれる猿尾枷のやうにさがりたる下に、あのしなやかなる黑髮引詰に結ふて、腸見へたるぼろ疊の上に、香露凝る半にして壁尙柔輭な纖細な身體を厭ひもせず、なよやかにおとなしく坐りて居る事か、人情なしの七藏め、多方は小鼻怒らし大胡坐かきて爐の傍に、アゝ憎さげの顏の見ゆる樣な、藍格子の大どてら着て、充分酒にも暖りながら分を知らねばまだ足らず、爐の隅に轉げて居る白鳥德利の寢姿忌ましそうに睨めたる眼ジロリと注ぎ、裁縫に急がしき手を止さして無理な吩咐、跡引き上戶の言葉は針、とが〳〵しきに胸を痛めて答ふるお辰は薄肩の寒さに慄ふ歟唇、それに用捨もあらき風、邪見に吹くを何防ぐべき骨露れし壁一重、たるみの出來たる筵屛風、あるに甲斐なく世を經れば、貧には運も七分凍りて三分の未練を命に生るか、噫と計りに夢現分たず珠運は歎ずる時、雨戸に雪の音さら〳〵として、火は消ざる炬燵に足の先冷かりき。

第五　如是作

上　我を忘れて而生其心

よしや脊に暖ならずとも旭日きら〳〵とさしのぼりて山ゝの峰の雪に移りたる景色、眼も眩む計りの美しさ、物腥き西洋の塵も此處までは飛て來ず、清淨潔白實に賴母敷岐蘇路、日本國の古風殘りて軒近く鳴く小鳥の聲、是も神代を其儘と詰らぬ者にも面白く感ずるは、昨宵の嵐去りて跡なく、雲の切れ目の所ゝ青空見ゆるに、人の心の悠ゝとせし故なるべし。珠運梅干澁茶に夢を拭ひ、朝飯平常より甘く食ひて、泥を踏まぬ雪沓輕く飄ゝと立出しが、折角吾志を彫りし櫛與へざるも殘念、家は宿の鈴に聞て街道の傍を僅折り曲りたる所と知れば、立ち寄りて窓からでも投込まんと段ゝ行くに、果せる哉樅の木高く聳へて外圍ひ大きく、如何にも須原の長者が昔の住居と思はるゝ立派なる家の横手に、此頃の風吹き曲めたる荒屋あり。近付くまゝに中の樣子を伺へば、寥然として人のありとも想はれず、是は不思議と、やぶれ戸に耳を付て聞けば竊ゝと囁やくやうな音、愈〻あやしく尙耳を澄せば啜り泣する女の聲なり。

さては邪見な七藏め、何事したるかと彼此さがして、大きなる節の拔けたる所より覗けば、鬼か惡魔か言語道斷、當世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髮の恨は長く垂れて顏にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。見るから忽ち肉動き肝躍つて分別思案もあらばこそ、雨戸蹴ひらき飛込んで、人間の手の四五本なき事もどかしと焦燥まで忙しく、手拭を棄て繩を解き、懷中より櫛取り出して、亂れ髮梳けと渡しながら冷へ凍りたる肢體を痛ましく、思はずしかと抱き寄せて、嘸や柱に脊中がと片手に摩で擦するを、女あきれて兎角の詞はなく、ヂッと此方の顏を見つめるにきまり惡くなつて一ト足離れ退くとたん、其邊の疊雪だらけにせし我沓にハッと氣が注き、譯も分らず其まゝ外へ逃げ出し、三間ばかり夢中に走れば雪に滑りてよろ〳〵〳〵、あはや膝突かんとしてドッコイ、是は仕たり、蝙蝠傘手荷物忘れたかと跡もどりする時、お辰門口に來り袖を捉へて引くにふり切れず、今更餘計な業仕たりと悔むにもあらず恐るゝにもあらねど、一生に覺なき異な心持するにうろつきて、土間に落散る木屑なんぞの詰らぬ者に眼を注ぎ上り端に腰かければ、しとやかに下げたる頭よくも擧げ得ず、あなたは龜屋に御出なされた御客樣、わたくしの難儀を見かねて御救下されたは眞にあり難けれど、到底遁れぬ不仕合と身をあきらめては、斷念なかつた先程までの愚が却つて口惜う御座りまする、譯も申さず斯う申しては定めて道理の分らぬ奴めと御輕侮も恥しうはござりまする、御慈悲深ければこそ繩まで解て下すつた方に御禮も能は致さず、無理な願を申すも眞に苦しうは御座りまするが、どうぞわたくしめを元の通りお縛りなされて下さりませ、と案の外の言葉に珠運驚き、是は〳〵とんでもなき事、色ゝ入り込んだ譯もあろうがさりとては强面御賴み、縛つた奴を打てとでも云ふのならば痩腕に豆計の力瘤も出しませうが、いとしうて〳〵一日二晩絕間なく感心しつめて、天晴菩薩と信仰して居る御前樣を縛ることは、赤栴檀に飴細工の刀で彫をするよりまだ難し、一昨日の晚忘れて行かれたそれ〳〵その櫛を見ても合點なされ、一體は龜屋の亭主に御前の身の上あらまし聞て、失禮ながら愍然な事や、私が神か佛ならば斯もしてあげたい彼もしてやり度と思ひましたが、それも出來ねばせめては心計、一日肩を凝らして漸く其彫をしたも、若や御髮にさして下さらば一生に又なき名譽、嬉しい事と態ゝ持參して來て見れば、他にならぬ今のありさま、出過たかは知りませぬが堪忍がならで繩も手拭も取りましたが、惡いとあらば何とでも謝罪りましよ、元の通りに

縛れとはなさけなし、鬼と見て我を御頼か、金輪奈落其様な義は御免蒙る、と心清き男の強く云ふをお辰聞ながら、櫛を手にして見れば、ても美しく彫りに彫つたり、厚は僅に一分餘り、幅は漸く二分計り、長さも左のみならざる棟に一重の梅や八重櫻、桃はまだしも菊の花、薄荷の花の眼も及ばぬまで濃きを浮き彫にして香ふ計り、そも此人は如何なればかゝる細工をする者ぞと、思ふに連れて瞳は通ひ、竊に様子を伺へば、色黑からず口元ゆるまず、眉濃からずして末秀で、眼に一點の濁りなく、形狀の外におのづから賤しからぬ様露れて、其親切なる言葉、そもや女子の嬉しからぬ事か。

中　仁はあつき心念口演

身を斷念てはあきらめざりしを口惜とは云はるれど、笑ひ顏してあきらめる者世にあるまじく、大抵は奥齒嚙みしめて思ひ切る事ぞかし、到底遁れぬ不仕合と一概に悟られしはあまり浮世を恨みすぎた云ひ分、道理には合つても人情には外れた言葉が御前のその美しい唇から出るも、思へば苦しい仔細があつてと察しては、御前の心も大方は見えていぢらしく、ヱヽ腹立しい三世相、何の因果を誰が作つて、花に蜘蛛の巢、お前に七藏の縁じやややらと、天道様まで憎うてならぬ此珠運、相談の敵手にもなるまいが痒い脊中は孫の手に頼めじや、なよ〳〵とした其肢體を縛つてと云ふのでない注文ならば天窓を破つて工夫も仕様が一體まあどうした譯か、强て聞でも無れど此儘別れては何とやら佛作つて魂入れずと云ふ様な者、話してよき事ならば聞た上でどうなりと有丈の力喜んで盡しませう、と云れてお辰は、叔父にさへあさましき難題云ひ掛らるゝ世の中に赤の他人で是程の仁、胸に堪へてぞつとする程嬉し悲しく、咽せ返りながら屹と思ひかへして、段〻の御親切有り難は御座りまするが妾身の上話は申し上兼ねまする、申さぬではござりませぬが申されぬつらさを御察し下され、眼上と折り合ねば懲らしめられた計の事、諄〻と暗闇の恥を申てあなたの様な情知りの御方に淺墓な心入と愛想つかさるゝもおそろし、さりとて夢さら御厚意を蔑にするにはあらず、やさしき御言葉は骨に鏤んで七生忘れませぬ、女子の世に生れし甲斐今日知りて此嬉しさ、果敢なや終り初物、あなたは旅の御客、逢も別れも旭日があの木梢離れぬ内、せめては御荷物なりとかつぎて三戸野馬籠あたり迄御肩を休ませ申したけれどそれも叶はず、斯云ふ中にも叔父様歸られては面倒、どの様な事申さるゝか知れませぬ程にすげなく申すも御身の爲、御迷惑かけては濟ませぬ故どうか御歸りなされて下さりませ、ヱヽ千日も萬日も止めたき願望ありながら、と跡の一句は口に洩れず、薄紅となつて顏に露るゝ可愛さ、珠運の身になつてどうふりすてらるべき。

假令叔父様が何と云はれうが下世話にも云ふ乘りかゝつた船、此儘左様ならと指を嚙へて退くは、なんぼ上方産の膽玉なしでも仕憎い事、殊更最前も云ふた通りぞつこん善女と感じて居る御前の憂目を餘所にするは、一寸の蟲にも五分の意地が承知せぬ、御前の云はぬ譯も先後を考へて大方は分つて居ること、兎も角も私の云事に付たがよい、惡氣ですることはなし、私の詞を立て呉れても女のすたるでもあるまい、斯しましよ、是からあの正直律義は口つきにも見ゆる龜屋の亭主に御前を預けて、金も少しは入るだろうがそれも私がどうなりとして埒を明ましよ、親類でも無い他人づらが要らぬ差出た才覺と思はるゝか知らぬが、妹といふ者持ても見たらば斯も可愛い者であろうかと思ふ程いとしうてならぬ御前が、眼に見えた艱難の淵に沈むを見ては居られぬ、何私が善根爲たがる慾じやと笑ふて氣を大きく持がよい、さあ御出、と取る手。振り拂はば今川流、握り占なば西洋流か、お辰はどちらにもあらざりし所、無類珍重嬉しかりしと珠運後にて語りし由なるが、それも其時は嘘なりしなるべし。

下　弱に施すに能以無畏

コレ吉兵衞、御談義流の御説諭をおれに聞かせるでもなかろう、御氣の毒だが道理と命を二つならべてぶんなげの七様、昔は密男拐帶も仕てのけたが、穩當なつて我の姪子を、賣るのではない養女だか妾だか知らぬが、百兩で緣を切て呉れろといふ人に遣る計の事、それをお辰が間夫でもあるか小間癪れて、先の知れぬ所へ行は否だと吼顏かいて逃でも仕そうな様子だから、買手の所へ行く間一寸縛つて置たのだ、珠運とかいふ二才野郎がどういふ續きで何の故障だ。七、七、靜にしろ、一體貴様が分らぬは、貴様の姪だが貴様と違つて宿中での譽者、妙齡になつても白粉一ト つ付ず、盆正月にもあらゝ木の下駄一足新規に買はうでもないあのお辰、叔父なればとて常不斷能も貴様の無理を忍んで居る事ぞと、見る人は皆齒切を貴様に嚙むで涙をお辰に飜すは、姑に凍飯食はするやうな冷い心の嫁も、お辰の話聞ては急に角を折つてやさしく、夜長の御慰みに玉子湯でもして上ましよかと老人の機嫌を取る氣になるぞ、それを先度も上田の女術に渡そうとした人非人め、百兩の金が何で要るか知らぬが、あれ程の善い女を金に易へらるゝ者と思ふて居る貴様の心がさもしい、珠運といふ御客様の仁情が半分汲めたなら、そんな事云はずに有難涙に咽びそうな者。オイ、龜屋の旦那、おれとお吉と婚禮の媒妁役して呉れたを恩に着せるか知らぬが、貴様ミゝは廢て下され、七七四十九が六十になつてもあなたの御厄介になろうとは申ませぬ、お辰は私の姪、あなたの娘ではなしさ、きり〳〵此處へ御出なされ、七が眼尻の上らぬうち溫直になされた方が御爲かと存じます、それともあなたは珠運とかいふ奴に賴まれて口をきく計りじや、おれは當人じや無ければ取計ひ兼ると仰やるならば其男に逢ひましよ。オ、其男御眼にかゝらう、と珠運立出、つくん〳〵と見れば、鼻筋通りて眼つきりゝしく、腮張りて一ト癖確にある惡物、膝すり寄せて肩を怒らし、珠運とか云ふ小二才はおのれだな、生弱ミしい顏をして能もお辰を拐帶した、若いには似ぬ感心な腕、併し若いの、鬪鷄の前では地鷄はひるむは、身の分限を知たなら尻尾をさげて、四の五のなしにお辰を渡して降參しろ。四の五のなしとは結構な仰せ、私も手短く申しませうならお辰様を賣せたくなければ御相談。ふざけた嘆語は置てくれ。コレ七、靜に聞け、どうか賣らずと濟む工夫を、と云ふをも待たず、全體小癪な旅烏と振りあぐる拳。

アレと走り出るお辰、吉兵衞も共に止めながら、七藏、七藏、扨も其方は智慧の無い男、無理に賣ずとも相談のつきそうな者を。フ、相談付ぬは知れた事、百兩出すなら呉れてもやろうが、とお辰を捉へ立上る裙を抑へ、吉兵衞の云ふ事をまあ下に居てよく聞け、人の身を賣買するといふは今日の理に外れた事、娼妓にするか妾に出すか知らぬが。ヱゝ喧擾しいは老耄、何にして食はうがおれの勝手、殊更内金二十兩まで取つて使つて仕舞つた、變改はとても出來ぬ、大きに御世話、御茶でもあがれ、とあくまで罵り、小兎攫む鷲の眼ざし恐ろしく、龜屋の亭主も是までと口を噤むありさま珠運口惜く、見ればお辰はよりどころなき朝顏の嵐に逢ひて露脆く、此方に向ひて言葉はなく深く禮して、叔父に付添立出る二ヵ足三足め、又後ふり向きし其あはれさ。八幡命かけて堪忍ならずと珠運七を呼留め、百兩物の見事に投出して、亭主お辰の驚にも關はず、手續油斷なく此惡人と善女の緣を切りてめでたしめでたし、まづは龜屋の養女分となしぬ。

第六　如是緣

上　種子一粒が雨露に養はる

自分妾狂しながら息子の傾城買を責る人心、あさましき中にも道理ありて、七の所業誰憎まぬ者なければ、酒呑で居ても彼奴姪の血を

吮ふて居るはと蔭言され、流石の奸物も此處面白からず、荒屋一トつ遺して米鹽買懸りの云譯を家主龜屋に迷惑がらせ、何處ともなく去りける。珠運も思ひ掛なく色ミの始末に七日餘り逗留して、馴染につけ亭主頼もしくお辰可愛く、圍爐裏の傍に極樂國、迦陵頻伽の笑聲睦じければ、客あしらひされざるも却て氣樂に、鯛は無くとも玉味噌の豆腐汁、心協ふ同志安らかに團坐して食ふ甘さ、或は山茶も一時の出花に、長き夜の徒然を慰めて圍ひ栗の皮剝てやる一顆のなさけ、嬉氣に賞翫しながら彼も剝きたるを我に呉るゝおかしさ、實に山里も人情の暖さありてこそ住ば都に劣らざれ。

　さりながら指折數ふれば最早幾日か過ぬ、奈良といふ事憶ひ起しては空しく遊び居るべきにあらずと、ある日支度整へ勘定促し立出んといふに亭主呆れて、是は〳〵、婚禮も濟ぬに。ハテ誰が婚禮。知れた事お辰が。誰と。冗談は置玉へ、あなたならで誰と、と云れてカッと赤面し、乾きたる舌早く、御亭主こそ冗談は置玉へ、私約束したる覺なし。イヤ怪しからぬ、野暮を云るゝは都の御方にも似ぬ、今時の若者がそれではならぬ、さりとては百兩投出て七藏にグッとも云はせなかつた捌き方と違つておぼこな事、それは誰しも恥かしければ其樣にまぎらす者なれど、何も紛すに及ばず、爺が身に覺あつてチャンと心得てあなたの思わく圖星の外れぬ樣致せばおとなしくして御待なされ、と何やら獨呑込の樣子、合點ならねば、是是御亭主、勘違ひ致さるゝな、お辰樣をいとしいとこそ思ひたれ女房に爲樣なぞとは一厘も思はず、忍びかねて難義を助たる計の事、旅の者に女房授けられては甚だ迷惑。ハハハハハア、何の迷惑、器量美しく學問音曲のたしなみは無とも縫針暗からず、女の道自然と辨へておとなしく、殿御を大事にする事請合のお辰を迷惑とは、兩柱の御神以來圖ない議論、それは表面、眞を云へば御前の所行も曰くあつてと察したは年の功、チョン髷を付て居ても粹じや、實はおれもお前のお辰に惚たも善く惚た、お辰が御前に惚たも善く惚たと當世の惚樣の上手なに感心して、媼とも相談して支度出來次第婚禮さする積じや、コレ珠運、年寄の云ふ事と牛の鞦外れそうで外れぬ者じや、お辰を女房にもつてから奈良へでも京へでも連れ立て行きやれ、おれも昔は脇差に好をして、媼も鏡を懐中してあるいた頃、一世一代の贅澤に義仲寺をかけて六條樣參り一所にしたが、旅ほど嗅が可愛うておもしろい事はないぞ、いまだに其頃を夢に見て後での話しに、此間も媼に眞夜中頃入齒を飛出さして笑つたぞ、コレ珠運、ホイ是は仕たり、孫でも無かつたに、と罪のなき笑ひ顏して奇麗な天窓つるりとなでし。

中　實生二葉は土塊を抽く

我今まで戀と云ふ事爲たる覺なし。勢州四日市にて見たる美人三日眼前にちらつきたるが、其は額に黑痣ありてその位置に白毫を付なばと考へしなり。東京天王寺にて菊の花片手に墓參りせし艶女、一週間思ひ詰しが、是も其指つきを吉祥菓持せ玉ふ鬼子母神に寫してはと工夫せしなり。お辰を愛しは修業の足しにとにはあらざれど、之を妻に妾に情婦になどせんと思ひしにはあらず、强ゐて云はば唯何となく愛し勢に乘りて百兩は與しのみ、潔白の我心中を忖る事出來ぬ爺めが要ざる粹立馬鹿ミミし、一生に一つ珠運が作意の新佛體を刻まんとする程の願望ある身の、何として今から妻など持べき、殊にお辰は叔父さへなくば大盡にも望まれて有福に世を送るべし、人は人、我は我の思わくありと決定し、置手紙にお辰宛て少許の恩を枷に御身を娶らんなどする賤しき心は露持たぬ由を認め、跡は野となれ山路にかゝりてテク〳〵歩行。

　さても變物、此男木作りかと譏る者は肉團奴才、御釋迦樣が女房捨て山籠せしは、耆婆も匕を投た癩病、接吻の唇ポロリと落しに愛想盡してならんなど疑ふ儕輩なるべく、尊し尊し、銀の猫捨た所が西行なりと喜んで譽むる輩、是も却つて雪のふる日の寒いのに氣が付ぬ詮義ならん。人間元より變な者、目盲ひてから其昔拜んだ旭の美しきを悟り、巴里に住んでから澤庵の味を知るよし。珠運は立鳥の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com